りまで致しますよ」

とにこ〳〵していらしつた。

×

食後の散歩は私達の娯樂の一つだ。夕轟きの町を離れた西片町を、から橋の邊から一週するのは本舍に居ては味ひ得ぬ所である。學者町の夕暮、薄明の光に表札を讀むのも一種の興味がある。時には靜かな琴の音も流れて來る。夢の樣なローマンスを思ひながら、はた勝手な熱を吹きながら二人三人、このゆかしい通を占領し得るは實に嬉しい。

×

默學の鐘がなる、暫くすると建物全体が沈默に入つて了ふ。世界はたゞ自分ある許り、稍獨座に近い感が得られないでもない。ハラリと返す頁の音、快く走るペンの音、其音に一輪ざしのひなげしがゆらぐ。この靜けさとこのロマンテックな花の匂とが、しつくり合つてこゝに森川町の夜の氣分があらはれる。あゝどうして牛町出れば瓦斯の灯がかがよふ電車道があると思へよう。

終りの鐘がなる。塵拂ふとて觸れる電燈の球のぬくもり。私達は顏を見合せて靜かに笑ふ。樂しげなさゝめきが洩れて來る、お隣か、食堂か、沈默は柔らかさとなつかしさとで色付けられる、而かも尙中心は依然として靜である、やがて消燈の偉大な深い沈默が、のつそりやつて來る、窓は一つ〳〵暗の中に融け去つて七時間の深い睡に入つ了ふ。(5·26.)(S)

(二)女子教育に關するもの

成瀨仁藏 女子教育 嵩山堂	明治二九	二	四〇
諸名士 教育大家女子教育論集 普及社	三〇	一一	五〇
○育成會 實驗教育叢書第四編 近世女子教育法 同文館	三二	二	二五
○下田次郎 女子教育 金港堂	三七	一二	二、〇〇
村上專精 女子教育管見 金港堂	三八	二	四五
澤田順次郎 女子教育論 讀賣新聞社	四〇	一〇	四五
○ラスキン原著 下田次郎譯 女子の本分 金港堂	四一	八	三〇
小野竹三 女子教育に就いて六合館	四二		二
西山悊治 お花は如何にして教育すべきか 金港堂	四四	七	三五
○谷本富 女子教育 實業之日本社	四四	一一	一、〇〇
フエネロン原著 大木太藏譯 女子教育論 金港堂			六〇

■愛知縣　土屋つね

一、名古屋史談（庵原小金吾）
　なごやまつり（伊勢門水）
　愛知縣紀要（愛知縣）
　愛知縣寫眞帖（愛知縣）
　愛知縣案内（名古屋經濟會）
二、無し
三、婦人會（松操會……松の操月刊）
　大正義會　一德會　市立第一幼稚園母の會
四、無し

■岩手縣　初鹿野とみ

一、鄕土の地理に關しては當地等は何等見るべきものも之無くやはり地名辭書位のものに候はん
　歷史は南部史要（原敬著）平泉誌などいふもの之有るのみ其他言語文學土俗等の編輯物なども見あたらず他に比して非常に未開の樣感じ申候
二、無し
三、社會敎育としては通俗講演會時々開かれ先日も久留島先生を聘し候其他は之無く候
四、習字は私は大体に於て校長先生の御說御もつともと存じ申し候
　イ、字體は楷　一體にては余に限られて不便ならずやと考へ居り候只三体までの必要はなく楷草の二體位にては如何にやと存じ候
　ロ、字の大さにつきては校長先生の御說の通りと切に存じ候されど新入學して一年間は生徒は大きく習はしむる方よろしからんと存じ候
　作文は自分が敎へて見て切に複雜なるをうるさく感じ申候校長先生の御說御尤と存し居り候

■山口縣　佐藤たみ子

一、柳井案内　神田靜江氏校閲　鎌倉孤燈編
　山口縣各地の分はそれ〳〵各校より報導あるべきと考へられ候につき當地の分丈申上候
二、無し
三、佛敎婦人會　放光婦人會　柳井婦人會は企圖中にて近々開かるゝ筈に候
四、習字は細字練習に重きを置き作文は國語敎科等と相關連して課するも下級生には書牘文の國語文を多くし上級生には普通文と半々にし其十分